（別紙様式）

平成２８年度　　学 校 評 価 シ ー ト

学校名：　和歌山県立桐蔭高等学校　　学校長名：　岸田　正幸　印

目指す学校像・育てたい生徒像	自ら人生を切り拓く人を育てる 改革への情熱と伝統を重んじる心を育てる

本年度の重点目標（学校の課題に即し、精選した上で、具体的かつ明確に記入する）	
１	主体的な学習姿勢の育成と教員の更なる指導力向上に取り組む
２	生徒に進路目標を実現させるための組織的かつ系統的な取組を行う
３	自主的・自律的な生活習慣・学習習慣を確立させる
４	中高の強化を図り、１０周年目を迎える一貫教育の新たな展開を模索する。

達成度			
	A	十分に達成した	（８０％以上）
	B	概ね達成した	（６０％以上）
	C	あまり十分でない	（４０％以上）
	D	不十分である	（４０％未満）

学校評価の結果と改善方策の公表の方法
保護者に対して自己評価及び学校関係者評価の結果を知らせるとともに、本校ホームページにおいても広く公表する。

（注）１　重点目標は３～４つ程度設定し、それらに対応した評価項目を設定する。　２　番号欄には、重点目標の番号を記入する。　３　評価項目に対応した具体的取組と評価指標を設定する。
４　年度評価は、年度末（３月）に実施した結果を記載する。　５　学校関係者評価は、自己評価の結果を踏まえて評価を行う。

自　己　評　価

重点目標					年度評価（３月２４日 現在）		
番号	現状と課題	評価項目	具体的取組	評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善方策
1	高等教育機関への進学を希望している生徒に対し、その基盤となる知識・技能を定着させることが現在の課題である。「わかる授業」から「面白い授業」へと更なる授業の質の向上をはかり、生徒に学習意欲や目的意識を持たせることで、学習時間を増加させるとともに、主体的・能動的な学習態度を育成する取組が必要である。	生徒の自主性を高め、学習意欲を喚起する授業が各科目において展開されているか。 生徒の実態把握に努め、実態に応じた指導がなされているか。教科全体として学習指導方法の改善に取り組んでいるか。	・研究授業・公開授業の実施 ・教員間における学習指導法の共有による授業力の向上 ・進学補習や基礎補習の充実 ・個別指導の充実	・研究授業・公開授業の実施 ・各種補習の総時間数 ・添削指導や個別指導の実施状況	研究授業や公開授業が自発的・積極的に行われ、授業力の向上を目指す風土が力強く根付いてきた。（校内ＦＤ研究授業は年間で 41 回実施） 昨年度は実施出来なかった 1,2 年生の夏期補習についても、今年度は実施することができた。家庭学習時間 2 時間未満の生徒については近年大きな変化は見られていない。学年会で様々な情報交換を行っているが、協議の面では不十分な点が残る。	A	ＦＤ会議を軸に研究授業や公開授業を積極的に行える体制を維持し、職員間の指導法の共有およびさらなる授業力の向上を目指す。 ３年生の通常補習についてはクラブの状況も考え、実施時期の検討が必要である。家庭学習時間の増加のためには学校・生徒・家庭の連携はもちろん、いかに教師が動機付けをし、主体的な学習態度を育成できるかが今後の課題である。同時に計画的な課題提示が出来ているか検証していく必要がある。
			・学年・教科等の連携による家庭学習時間確保の指導 ・桐蔭ＳＴの分析および対策	・実態調査にみられる家庭学習２時間未満の生徒の割合			
			・家庭学習の指導を踏まえた計画的な課題提示のための教科内外での情報交換協議	・学年会・教科会での情報交換・協議の実施			
2	生徒の多くは、難関大学進学を目指し、文武両道を実践しようとする意志と、将来を見据えた高い志を持って入学してくる。この生徒たちの気持ちを継続させて本気でチャレンジしていく姿勢を集団として育てる取組が必要である。また、そのための基盤となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促し、一人一人の進路希望の実現と将来に向けた組織的かつ系統的なキャリア教育が必要である。	生徒のキャリア発達を促し、自らの進路実現に向けて意欲的かつ自律的に学習できるよう、具体的な取組が系統立てて展開されているか。 自らの人生を切り拓きつつ、社会に貢献できる人材育成のために、基礎的・汎用的能力を育成するための指導を組織的に行っているか。	・教科「キャリア桐の葉Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ」の各プログラムの実施 ・桐蔭リーダー塾やジョブシャドウイング等の体験学習の機会の有効活用	・「キャリア教育・進路に関する調査」、「付けたい力３０」、「学びの意識調査」等の各種調査を用いた分析・評価	桐の葉Ⅲ、Ⅵの実施、最終年次発表会等を通しまとめが行えた。 定期的な「進路便り」の発行及び担任による個人面談を通して定期テストや模試の振り返りから自身が取り組むべき課題を明確にしながら継続的な学習がなされた。また、進路講演会による学習に対する動機づけの補強も出来た。難関大学への挑戦を根底に持ちながら、自身の能力が最大限に発揮できる環境はどこなのかを、オープンキャンパスへの参加・キャリア桐の葉での能動的な学習などを通して追求出来た。全国的な入試状況や、難関大学入試問題や小論文の研究会への教員の積極的参加もみられた。OB・OG による懇談会などへの協力も得られた。	A	入試改革の進む中であるので、情報提供のあり方に最善の注意を払うこと。具体的には「進路便り」や担任への速やかな情報提供を心がけ、進路指導部の教員を中心にアンテナを高くして、各種研究会にも積極的に参加していくこと。難関大学への チャレンジの意欲な年々高まっており、学年全体の雰囲気にも表れ出している。結果を恐れずに最後まで第 1 志望を貫き出願させる体制を、職員全体の共通認識としてつくり出していく必要は感じる。進路目標とキャリア桐の葉の目標を整理し、互いのカリキュラムと合わせて統合整理すること。保護者会や地区懇談会、三者面談を通して「挑戦」の進路指導を共有すること。
			・「進路だより」による継続的な生徒への働きかけ ・進路講演会、オープンキャンパス、桐蔭総合大学等への積極的な参加の啓発	・「進路だより」の発行時期と内容 ・開催回数や参加人数及び生徒への事後アンケート等による調査			
			・日常的な面談等を通して生徒自身による現状分析と課題の発見を促し、自学自習力をつける	・生徒の進路選択に対する意欲や進路意識の変容および学習成果			
			・教員の指導力強化と生徒情報の共有のための現職教育、進路検討会や成績分析会議の実施	・実施回数と教員への事後調査			
3	一部に遅刻、身だしなみの課題を残すが、生徒は概ね規律ある学校生活を営んでいる。今後は生徒が自らのキャリア形成に資するよう、風紀面に留まらず学習活動も含めて課題を自ら見いだし、解決に臨む力の涵養が課題である。 また人間関係の構築に未熟な生徒や心の課題を抱えるへの支援の要請が強まっている。 生徒が安心して過ごす学校環境の維持といっそうの充実を図り、挨拶を皮切りに自ら踏み出すことへの積極性を育てる意識を職員共通のものとする。	生徒が自律的に行動し自己管理力を高める支援のための重点項目としての、 ・遅刻、下校指導 ・交通安全指導 ・身だしなみと持ち物の管理指導 ・相談体制の組織化と効率化 ・職員からの声かけ、挨拶の励行 ・中高を一貫しての生徒指導 が適正に行われているかどうか。	・年間を通した毎朝の校門指導と挨拶、声かけの実施 ・19：00 完全下校の定着化	・通年遅刻者数の増減と個々の事情の把握 ・校内巡視の件数	生徒への働きかけは継続されている。遅刻は全体では微減傾向が続き、6 回目指導以上は９名と昨年とほぼ同じであり、３回目は３５とかなり減少している。19：00 完全下校は課題が残された。交通事故報告数は昨年並み（８件）で全て自転車で、通報・応対等の生徒への指導も概ねできていた。身だしなみは概ね良好である。上記それぞれに課題を残す生徒がいるが、生活環境や個々の「心」の課題を踏まえた理解がより求められる。外部からのルール･マナー違反の指摘は２件あった。 教育相談のケース会議は必要に応じて随時実施された。対応への体制が一定整った。カウンセリングは希望者が増えている。	B	現在の取り組みを継続し全職員による指導を進める。校内施設の適正利用や各種活動の指導を通してマナー・ルールの遵守を含む自主性の涵養が今後さらに重要となる。 生活指導は従来の取り組みだけにこだわらず、個々の実情に応じた指導を心がけ、関係職員、機関との連絡・連携を重視する。また生徒に関しては初期、初動の対応の重要性を全職員が認識し、情報の収集・精査・分析等を複数の目で進める。定期な情報交換はもちろん、随時の必要に応じた校内の人的資源の配分に今後いっそう工夫する必要がある。
			・交通規則の遵守、交通マナーアップ・安全意識と公共心の育成 ・定期的な登校時の校外指導	・ＰＴＡと連携した交通指導と挨拶の励行 ・交通事故の発生件数とその把握、対応			
			・身だしなみのあり方、駐輪を含む持ち物の管理、挨拶の意義についてアセンブリーや通信等あらゆる機会を通しての啓発	・身だしなみ指導件数 ・駐輪場の使用状況 ・来校者の反応			
			・教育相談体制の点検と効率化 ・現職教育による教職員の理解 ・生徒情報の把握、共有と守秘	・カウンセリング室利用状況 ・ケース会議の実施状況 ・情報共有の具体的手立て			
4	中高連携に関して、具体的な取組を検討する機会が減少している。ＦＤ会議やキャリア教育を核として、一貫教育の新たな展開を模索する。	中高一貫の具体的な検討が進んだか。 ２年次からの内進・外進生の混合クラスによる成果と課題が検証ができたか。	・ＦＤ会議を活用して、中高の教職員による情報交換や意見交換	・ＦＤ会議等での情報意見交換会の実施	ＦＤ研究授業の実施回数も増え、中学・高校間で互いの授業を見学する機会が多くなり、中高職員が交流し認識を共有する機会が増えた。今年度、初めての卒業生を出す混合クラスの検証については今後も継続課題である。	B	今年度までに培われてきた、積極的・自発的なＦＤ研究授業の風土を維持し、中高の連携を継続する。中学生と高校生の交流については、今後も行事等の機会を活用していきたい。
			・次年度に向けた成果と課題についてＦＤ会議での検討	・ＦＤ会議での検討内容			

学　校　関　係　者　評　価

平成２９年２月１０日　実施

学校関係者からの意見・要望・評価等

教職員自己評価、生徒評価、保護者評価の結果を受けて、学校評議員（兼 学校関係者評価委員）の皆様から頂いたご意見等をまとめると、概ね次のとおりである。

（１）キャリア教育の充実、桐蔭スタンダードテストの作成、桐蔭 FD 会議の開催、プロモーションビデオの作成等、校長のリーダーシップの下、組織的に進めていることがわかるが、FD 研究授業など、教職員の負担が過多になっていないか、常にチェックをしてもらいたい。

（２）FD 研究授業で、要点の部分のみを記載するよう、簡素化され、統一化された指導案の様式は、他校の実践にも役立つように思われる。

（３）キャリア教育の効果を長期的に検証するため、生徒が卒業してから 5 年後、10 年後にモニタリングする方法を開発し、実践してもらいたい。

（４）キャリア教育の効果として、生徒が進学先を考えるとき、将来の職業を見越して考える生徒が多くなってきたように思われる。保護者としてたいへんありがたく思っている。

（５）言われたことはきっちりできるが、失敗してもいいので、自分で考えて、行動できる人材の育成を、今後より一層めざしていってもらいたい。

（６）生徒やその保護者が、専門のカウンセラーとの教育相談を受けることができるなど、手厚サポートはありがたい。